

五歳児三学期の経験をふりかえる

鈴 木 正 子

◎はじめに

歩いたあとをふりかえって、また次くる機会に備えたい。私はそんな気持ちからこの項を記してみたいと思います。

今回は私どもの園の五歳児三学期の生活を中心にして、その経験や活動について考えてみることにいたしました。

五歳児の三学期は、幼児たちにとって最後の園生活でありますし、また学校生活への移行期でもあります。それがどうか楽しく充実したものになるようにということが私の願いでありましたが、学期が終わって振り返ってみる時、さまざまな反省や感想が残りました。そこで実践例に沿いながら、とくに心に残ったことがらについて書いてみようと思います。

次の表は、学期始めに選択した当園の五歳児三学期の予想される経験や活動ですが、実践例と照合しながらご覧いただければ幸いです。

昭和41年度 5歳児教育計画

群馬大学附属幼稚園

一月の 目標	○お正月の遊びを楽しむ	○冬の自然について関心をもつ	おもな 経験や活動
	○「もうすぐ一年生」という自覚をもち、自主的に行動する		
	○誕生祝い・健康祝いをする	○一月の体重測定をする ○いろいろな約束やきまりを守る ・自分で身じたくをする ・きめられた時刻までに登園する ・自分から進んであいさつをする ・自分で持物のしまつをする ・忘れものをしない ・皆と元気に仲よく遊ぶ ・遊んだあとをかたづけ ・人の話を静かに聞く ・責任をもって仕事をする	
		○冬の季節に関心をもつ ・雪・氷・霜柱を見る ・雪や氷で遊ぶ ・日なたと日かげをくらべる ・寒暖計を見る	
		○お正月の楽しかったことを絵にかいたり、リズム遊びをする ○いろいろなものをつくって遊ぶ ○かぞえうたをつくる ○成人の日について話を聞く	
		○お正月の遊びをする (かるた・すごろく・トランプ) (まりつき・こままわしなど)	

二月の目標	○豆まきの行事を楽しむ ○のびのびと自分の考えを表現する ○冬の健康管理について関心をもつ
	<div style="float: right; width: 10%; text-align: center;">おもな経験や活動</div> <ul style="list-style-type: none"> ○豆まきを中心にした遊びをする <ul style="list-style-type: none"> ・ 節分の話を聞く ・ 豆まき遊びに必要なものをつくる ・ 豆まきのリズム遊びをする ・ 豆まきをして豆をひろう ・ ひろった豆をみんなでわけ ・ 豆まきのおもしろかったことを話し合ったり、絵にかいたりする ○絵本つくりをする <ul style="list-style-type: none"> ・ 絵本つくりの相談をする ・ どんな本をつくるか考える ・ 絵本をつくる ・ つくった絵本のお話をみんなにしてあげる ・ つくったお話をテーブルコーダーにふきこむ ・ 友だちのつくった本を見る ○冬の健康に注意する <ul style="list-style-type: none"> ・ お天気の良い日は外で遊ぶ ・ 健康に関する紙芝居やスライドを見る ・ うがい、手洗いをよくする ○二月の体重測定をうける ○ひなまつりを中心にした遊びをする <ul style="list-style-type: none"> ・ おひなさまを先生といっしょにかざる ・ おひなさまの話を聞く ・ おひなさまをつくる ○誕生祝い・健康祝いをする

三月の目標	○ひなまつりを楽しみ、くふうしておひなさまをつくる ○自然の変化に気づく ○一年生になる期待と喜びをもつ ○残りすくない幼稚園生活を楽しむ
	<div style="float: right; width: 10%; text-align: center;">おもな経験や活動</div> <ul style="list-style-type: none"> ○ひなまつりを中心にした遊びをする <ul style="list-style-type: none"> ・ おひなさまをつくる ・ つくったおひなさまをかざる ・ ひなまつりにちなんだ紙芝居や灯を見る ・ おひなさまの前でみんなで遊ぶ ○季節の移り変わりに気づく <ul style="list-style-type: none"> ・ 園内外の木の芽、花のつぼみの成長を見る ・ 暖かい日ざし、そよ風に気づく ○三月の身長・体重の測定をうける ○「のびる子ども」を見て一年間の成長を知る ○受持の先生の絵をかく ○お友だちに絵をかいて送る ○もうすぐ学校へ行くことについて話し合う ○修了式や謝恩会の練習をする ○今まで使った保育用品や遊具を整理する ○誕生祝い・健康祝いをする ○修了式・謝恩会に参加する

注

これらの経験の選択にあたっては、幼児の興味と教育的なねらいとが両立するような経験を考えました。また幼児に無理のないように、そして領域があまりかたよらないように、量や内容の調整にも気をつけました。

しかしながら、これはあくまでも教師の計画したものであって、これをすべて幼児の上に行なったものではありません。

クラスによって展開のしかたがちがったり、幼児の状態によって変更をみたものもありました。またここにあげられていない、たとえば食事時、登降園時などにおける経験もあったことを付記します。

◎実践例

○正月の遊びをする。一月中旬～二月上旬頃まで。

ねらい

・お正月の遊びをグループで楽しむ

・ルールを守って遊ぶ

・遊びをとおして数や文字に興味をもつ

私はまだお正月気分のぬけきらない三学期の初めにお正月の遊びをもつてきて、新学期のすべりだしをスムーズにしたいと考えました。そこで幼児が登園したら、すぐにすきな遊びが始められるようにと、かるた、トランプ、すごろく、福笑いなどのゲーム、まり、こまなどの遊具をたくさん用意しておきました。幼児は家庭でのお正月気分を幼稚園にも見出してすぐお友だちと遊び始めました。

あちらこちらにグループをつくり、笑いさぎめきながら展開される遊びは楽しいものでした。そしてこの遊びはグループによる双六つくりにまで発展いたしました。

そしてこの遊びの中で、先にあげたようなねらいが十分に達せられたことはいうまでもありませんでした。とくに文字や数への関心が自然のうちに高められたことは、五歳児三学期の幼児にとってよかったと思いました。これなどは、幼児の興味と教育的な

ねらいとがびつたりと一致したよい例でありましょう。

教師は遊びを計画する場合、幼児のその時おかれた環境などから考えて、幼児のもっている欲求を察知して、それに合わせた計画を立てることが大切であると思われました。そのようにして選ばれた遊びは、必ず幼児の中に根をおろし発展するものだと考えました。

○かぞえうたをつくる 一月下旬

ねらい

・うたのもつユーモアなメロディーを楽しむ

・うたの言葉をくふうして考える

・数の順序に関心をもつ

一丁目のいちすけさん いまなにしていた

いもやの横丁を 曲がってころんだ

お正月になると盛んになると、まりつきうたの中にこんなのがあります。私たちがこのうたをかりてかぞえうたを作ることから、もう何年になるでしょう。

このうたのもつユーモアでひなびた感覚が幼児たちをとて喜ばせるのです。

今年も、最初一番のうたで、まりつきをしているうちに何となく次がなくなっておかしいということになりました。ではみんな

考えてつくろうということになり、クラス全体で考えることにいたしました。ところが意見百出で、とうとう多数決できめることになってしまいました。

二丁目のいすけさん

いまなにしてた

にいちちゃんと一緒に 学校へ行った

三丁目のさんすけさん

いまなにしてた

猿の三ちゃん

あそんで、シャッシャッシャッ（拍手）

四丁目の四すけさん

いまなにしてた

ヨットにのって

海を渡った

後略

これがその作品で十番まであるのですが、紙面の関係で割愛いたします。このあともつくったうたでまりつきを楽しんだことはいうまでもありません。

しかし、振り返って考える時、発想も誘導もよかったと思うのですが、つくる段階にきて大きなあやまりをしてしまいました。

まりつき



それは、全体の幼児でつくったために多数決などという結果に終わってしまったことです。

もしも、もう少し少人数でつくったならば、もっとみんなの意見を取り上げられ、多分たくさんのかぞえうたができたでしょうに。

指導を全体にもってきてしまった教師の愚を反省いたしました。指導の形態は幼児の年齢によっても、経験の内容によってもちがってくるでしょうが、教師はその時々に従って、最もふさわしい形態を選ばなくてはならないと思いました。

○南極つくりをする 一月下旬

今度は幼児の中から自然に生まれた遊びに目を移してみたいと思います。

一月下旬ともなると、冬もたけなわになってきます。上州特有の赤城おろしに顔や手を真赤にして、氷や霜柱集めが始まるのもこの頃です。あちらの池からこちらの水道流しから、なるべく厚く張った氷を取ろうとして夢中になります。小さい手で持ちきれないような石を、池の上に落として氷をかいたり、氷を追いかけて池の中をかきまわしたり、教師がはらはらさせられることもたびたびです。

そんなある日のこと、四、五名の男児から始められたのが南極

つくりでした。

この間見た絵本の影響のようです。最初は外のベランダの上に氷のかけらを運んできては、ただ南極だといっては積み上げていきましたが、「南極にはどんなものがいたかしら」と私の問いにきそわれて、ペンギンや船をつくり始めました。しかし真冬の上州のこと、風がひと吹きすると、折角画用紙でつくったペンギンや船もどこかに行ってしまうようなありさまです。つくってはとばし、つくってはとばしてしまいましたが、とうとう思案の末に遊びは室内に移ってきました。そして彼らは今度は氷の代わりに積木を白い紙で積み上げることを考え出しました。

そしてまた、いろいろなもの、たとえばペンギン、船、観測隊の人たち、鯨、怪獣などを、紙やあき箱や粘土などでつくり始めました。そしてそれらを配置したり、動かしたりして遊ぶのです。この頃には参加の人数もだんだんにふえて、ほとんどの男児が入ってきました。そしてそれに付随して無線ごっこなども始まり、ペアブロックを口にあてたり、腰に巻いたりした越冬隊員の姿もみられるようになりました。

私の仕事も時々もってくる相談に応じたり、幼児たちの空想力や想像力を高めたり、探究心を満たすために、絵本や紙芝居を与えるなどで忙しくなってきました。そして幼児、教師共々大変充実した日々になりました。

この遊びは二月上旬頃まで続き、幼児たちは自然のうちにこの遊びを通して創造力や協調性などのよいものを身につけてくれたようです。

さてこれは一例ですが私はしばしばこのような遊びにぶつかります。とくに五歳児の三学期ともなればなおさらのことです。

そして幼児の自発性から出発したあそびの力強さに驚かされません。それはちょっとした教師の誘導だけですばらしい発展をみせてもくれます。そして幼児たちは自然のうちによいものを学びとっていきます。私たちはこのような観点から考えて、もっともつと幼児自身から生まれる遊びを大切にしたいものだと思います。それにはいつも幼児たちの遊びの中にいて、そのチャンスのがさないことが大切ですし、また自分がたてた計画にとらわれないで、すぐに流れの方向を切り替えられる勇氣やゆとりがほしいものだとおもいます。

またそれに関連して、教師が計画した遊びに幼児たちを誘う場合にも、環境設定などに気をつけ、幼児が自発性をもって遊びに入れるように配慮したいものだと考えました。

○いろいろな約束やきまりを守る 一月上旬―三月中旬
ねらい

・「もうすぐ一年生」という自覚をもって自主的に行動する。

ひとりひとりの幼児についてみる時、だいぶ成長しましたが、まだまだ足りない面がみうけられます。園生活の最後の段階でありますし、学校生活へスムーズに移行するためにも、力を入れた経験なので、とくに大きく取りあげてみました。

五歳児の最終段階としては進んで守るところが重要だと思われますので、それを中心に気づいた点をかいてみたいと思います。

(4) 豆まきのお話をとおして

豆まきの日に私はこんなお話をしてみました。それは子どもたちのお腹の中にあるいろいろな鬼を豆をぶつけて追い出してしまおうというお話です。泣虫おに、いばりおに、ぐずぐずおに、けんかおに、うそつきおになどが、豆をぶつけられて山へ逃げて行きます。そして鬼を追い出した子どもたちは、みんな良い子になったということです。

さて、そのあと私は、みんなのお腹の中にはどんな鬼がいるかしらと聞きました。

四歳児時代に同じ質問をしましたが、ほとんどの幼児が「そんな鬼はいない」といったことを思い出し、その答がとくに期待されました。ところがどうでしょう。今度は「いる」というのです。しかも自分にふさわしい、くせや欠点を指摘した鬼の名をあげるではありませんか、私は期待していたとはいえ、幼児たちの

一年間の成長ぶりに驚いてしまいました。もうすでに自分自身をみつめることができるようになってきたのです。

さてその日の豆まきが意味深くおもしろいものになったことはいうまでもありません。

幼児たちは豆まきをとおして自分自身に気づき、とにかく悪いところは直してやろうとする気構えをみせてくれたことはたしかです。

(4) 話し合いをとおして

さてもうひとつこれも豆まきの頃のことだったと思います。みんな使った遊具の片づけがまだまだ進んでできない幼児がいるので、こんな方法をとってみました。

それは帰る前に、その日の当番に砂場や遊戯室や教室などを見まわってもらう方法です。

そしてその結果をみんなの前で報告してもらい、どうしたらよく片づけることができるかを話し合いました。その結果、

- ・自分で出したものは自分で片づける
 - ・もとあった所にもどしておく
 - ・まっすぐにおく
 - ・自分で使わなかったものでも手伝って片づける
- などの意見が出ました。そしてだんだんに全部の幼児が進んで片づけができるようになったことを思い出します。

さてこの二つの例から考えて、五歳児の生活指導は自覚をうながすことが可能な段階にきていますので、教師が指示するのでなく、幼児自身に考えさせることが一番よいような気がいたしました。そうすれば自然に進んで守るという態度もできてくるものと考えさせられました。

○おひなさまをつくる 二月下旬―三月上旬

ねらい

- ・ ひなまつりを楽しむ
- ・ おひなさまをくふうしてつくる
- ・ 材料を適切につかう
- ・ 色彩に関心をもつ

これも幼児にとって必然性に富んだ経験だったと思います。家庭から洋服のはしぎれやびんなどを持ち寄って自由に作ることを楽しみました。それぞれの創意にあふれたひな人形を前にして二年前の幼児のようすとくらべて心にせまるものがありました。

とくに自分から遊びをみつけることもできないでしょんぼりしていたAちゃん、Mちゃん、製作の時も絵をかく時もとなりの友だちのまねばかりしていたKちゃん、Nちゃん。

すぐあきてしまつてじつくりと仕事にとりくむことのできなかつたTちゃん、Hちゃんらの作品は前が前だけに素晴らしく思わ

れました。最初は引く手も重く感じられた子どもたちでしたのに、これならばもう大丈夫、学校へ行つてもひとりだけで歩いていけるでしょう。

私はここまで育てて来た喜びで一ぱいになるとともに、とかく見のがしがちな消極的な幼児たちを、これからも取りこぼすことのないようにしようと心に銘じました。

○木の芽さがし 三月中旬

寒い風にまけまいと力みながらとびまわっていた幼児たちも、三月の声といっしょに吹いて来るそよ風に、ほっとしたような表情をみせるようになります。

庭に出て遊ぶ時間も長くなり、幼児たちは今まで気づかないでいたいろいろなことを発見する機会が多くなってきます。

風が冷たくなったこと、

お日さまの光があたかいかいこと、

棒きれや石ころで絵を描く土が何となくやわらかく感じられる など。

そんなある日のことはじまったのが、木の芽さがしです。

「なんにも無かった木に芽が出ていた」

かくれんぼをして寄りかかった桜の木でHちゃんが発見した木の芽がはじまりで、あちこちの木の探索がはじまりました。私も

仲間に加わり、その辺で遊んでいる幼児をききました。

虫めがねを持ち出してくる幼児、さわってみる幼児もいます。

あじさい、ばら、ゆきやなぎ、もみじなど、どの木にも芽が出ています。しかもみんな形や色がちがっています。

幼児たちはもちろんのこと、私自身も驚いてしまいました。

そしてたくまずして幼児たちに、たくさん教材を投げ出してくれている自然の姿に感嘆してしまいました。

私はもともと幼児たちを自然のなかに放してやらなければいけないと考えました。そして心から感動したり、疑問をもったり、探究しようとする態度を育てたいものだと思います。

○もうすぐ学校 三月上、中旬

「もうすぐ学校」そういいながら大きな期待に胸をふくらませている幼児をみるにつけ、その移行がなめらかにいくようにと願うのがこの頃の教師の心境でありましょう。

黒い土から芽を出した

ふたばのようにすくすくと

のびる僕たち私たち

雨に嵐によく耐えて

つよく、正しく、かしこくなろう

大きな花を咲かせよう

和田 利男作詞

これは私どもの幼児が進学していく群馬大学附属小学校の校歌ですが、この歌が卒業期のクラスで歌われるのもそうした教師の配慮によるものです。

幼児たちは胸を張ってすでに小学生になったように歌います。

意味を理解しかねる部分もあるようですが、なにかしら小学校の雰囲気からだで感じているようです。

それにしてもクラスの幼児全員が同じ学校に進学できる私どもの園の制度は、幼児にとっても教師にとっても、ほんとうにうれしいことです。大切な幼児期を入試のための準備などに費やすことなく、のびのびと幼児本来の生活を大切にできたことは何といっても、かけがえのない幸せだったと思うものです。

◎おしまい

五歳児三学期の経験を中心にして、考えたこと、感じたことなどを思いつくまに記してきましたが、紙面もつきてきましたのでこの辺で稿を終わりたいとおもいます。

「これらのことをこの場かぎりのものとしないうで、明日の教育に役立つ」これが私に残されたこれからの課題であります。今度来る機会には、もっと幼児にとって望ましい経験を与えることができるよう努力していきたいと思えます。

(群馬大学附属幼稚園)